

# 電子メールによる依頼行動に関する日中対照研究 ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー\*

大連理工大学講師 王玉明

大連理工大学講師 聞 芸

## 要旨

本稿では、宇佐美まゆみが打ち出したディスコース・ポライトネス理論に基づき、中国人日本語学習者と日本語母語話者における電子メールによる依頼行動の相違を考察した。依頼行動において、中国人学習者と日本語母語話者は「挨拶」、「名乗り」、「状況説明」、「念押し」、「察し」、「詫び」、「間接依頼」、「直接依頼」、「先行感謝」、「祝福」など多くの発話要素に有意差があることが分かった。また、両者の依頼行動の「基本状態」を同定した結果、日本語母語話者は依頼対象が上位者である場合は、呼称ー挨拶ー名乗りー状況説明ー察しー詫びー直接依頼ー懇願となっているが、依頼対象が同位者である場合は、呼称ー挨拶ー予告ー状況説明ー直接依頼となっている。中国人学習者は依頼対象が上位者である場合は、呼称ー挨拶ー状況説明ー直接依頼ー懇願となっているが、依頼対象が同位者である場合は、呼称ー挨拶ー状況説明ー直接依頼となっていることが分かった。

## 1. はじめに

インターネットが普及し、グローバル化が進んでいる中、依頼行動を含む電子メールによるコミュニケーションが盛んになってきている。依頼は自分のために相手に時間や労力をかけさせるものであり、いわば相手に邪魔されたくないというネガティブ・フェイス (Brown and Levinson, 1987) を脅かす行為である (李, 2008)。この脅かし行為を緩和し、人間関係を維持するために、ポライトネスを考慮した振る舞いが要求される。浜田 (1995)、水野 (1996)、伊藤 (2003)、小林 (2004)、楊 (2004) などは単文レベルのポライトネスの視点から依頼行動を考察し、謝オン (2001)、謝韞 (2007)、母, 鄧 (2010) などはディスコースレベルのポライトネスの視点から依頼行動を考察した。しかし、これまでの研究はほとんど会話の場면을対象にしたものであり、電子メールによる依頼行動に関する研究はほとんどされていない。よって、本稿では電子メールによる依頼行動を対象に、ディスコース・ポライトネス理論に基づき、日本語母語話者と中国人日本語学習者における依頼行動の特徴を明らかにすることを目的とし、さらに、その結果が日本語教育の一助になればと思っている。

\*本研究は中央高校基本科研業務費一般項目 (課題番号: DUT15RW119) の成果の一部である。

## 2. 調査方法

本調査では日本在籍中の大学生又は大学院生 54 名、および中国某大学在籍中の日本語学部 2 年生と 3 年生合計 116 名を対象に次の場面を想定してもらい、電子メールを書いてもらった。それぞれ、49 部と 103 部を回収した。

場面 1：指導教官の佐藤先生に就職のための推薦状を書いてもらうために、メールを送ります。

場面 2：中国人（日本人）の友達に、中国語（日本語）のレポートをチェックしてもらうために、メールを送ります。

## 3. 電子メールにおける依頼行動の発話連鎖

### 3.1 ディスコース・ポライトネス理論

宇佐美（2001, 2008）は Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論を評価しながら、単文レベルでポライトネスをとらえている点を問題視し、それを克服する形でディスコース・ポライトネス理論（Discourse politeness theory。以下、DP 理論）を提唱した。DP 理論とは、「1 文レベル、1 発話行為レベルではとらえることのできない、より長い談話レベルにおける要素、および文レベルの要素を含めた諸要素が、語用論的ポライトネスにはたす機能のダイナミクスの総体」（宇佐美, 2001, 2003）である。DP 理論では、「基本状態」という概念を打ち出した。「基本状態」とは「談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』」（宇佐美, 2014）を指す。その「基本状態」は「典型的な状態の談話」における「主要な言語行動の構成比率（分布）の平均値や平均的な傾向」の算出・同定によるものである（宇佐美, 2014）。ポライトネスを相対的にとらえるために、特定の談話の「基本状態」を同定する必要がある。文化によってある言語行動や談話展開パターンの基本状態が異なる（宇佐美, 2006）とされている。

### 3.2 電子メールによる依頼行動の発話要素

「基本状態」を同定するために、「主要な言語行動の構成比率」を算出する必要がある。従来の研究と本文のデータを踏まえたうえで、電子メールによる依頼行動から「呼称」など 14 の発話要素をまとめた（表 1 参照）。

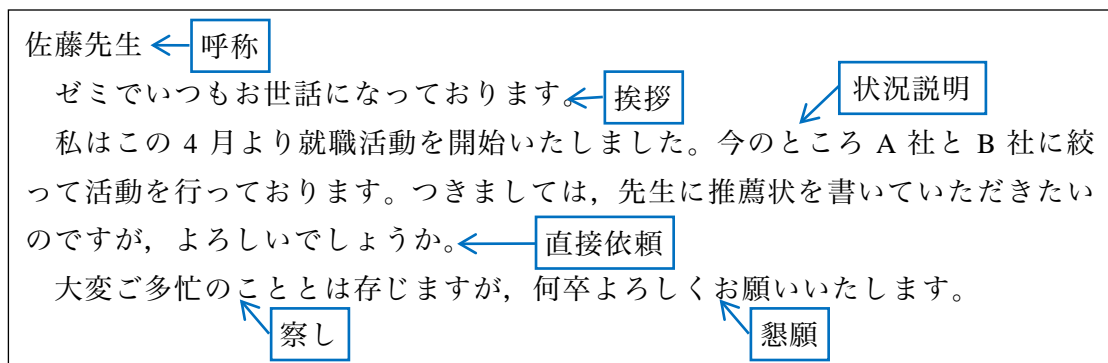
表 1 に挙げられた発話要素に基づき、収集されたデータを分析する。図 1 は場面 1 の分析例である。この例から「呼称」、「挨拶」、「状況説明」、「直接依頼」、「察し」、「懇願」などといった 6 つの発話要素が観察できた。

表1 電子メールによる依頼行動に見られる発話要素

発話要素	例
呼称	先生；さん；ちゃん
挨拶	こんにちは；元気ですか；いつも，お世話になって，ありがとうございます
名乗り	〇〇大学の〇〇です；いつもお世話になっている〇〇です
予告	ちょっとお願いがありますが
状況説明	今までに日本語でレポートを書いたことがありませんから，きっと間違ったところが多いと思います
念押し	お時間はありますか
察し	大変ご多忙のこととは存じますが
詫び	たいへん申し訳ございませんが；恐れ入りますが
間接依頼	先生に推薦状を書いていただきたいのですが，よろしいでしょうか；推薦状を書いていただければ幸いです。
直接依頼	佐藤先生に日本語で推薦状をお願いします
返事要求	返事早くね；お返事待ってます
先行感謝	どうもありがとうございます
懇願	(何卒) よろしく願いいたします；よろしく願いします
祝福	末筆ながら，先生のご健康をお祈りします；元気で

(出所) 筆者作成

図1 収集データの分析例



(出所) 筆者作成

## 4. 調査結果と分析

### 4.1 発話要素に対する日中対照

日本語母語話者と中国人学習者が異なる場面において，電子メールによる依頼行動の発話要素に相違があるかどうかを考察するために，収集されたデータについて分析・統計を行い，さらにt検定を通して両者間に有意差があるかどうかを検定する。各場面における両者の発話要

素の使用頻度と t 検定の結果を次の表 2 に示す。

表 2 に示した通り、依頼対象が上位者である場合、日本語母語話者と中国人学習者には「挨拶」、「名乗り」、「状況説明」、「念押し」、「察し」、「詫び」、「間接依頼」、「直接依頼」、「先行感謝」、「祝福」などといった 10 の発話要素に有意差があり、また、依頼対象が同位者である場合、両者には「名乗り」、「察し」、「詫び」、「間接依頼」、「直接依頼」、「返事要求」、「先行感謝」、「祝福」などといった 8 つの発話要素に有意差がある。両者間の共通点と相違点について詳しくみていく。

(1) 依頼対象が上位者である場合、「呼称」、「予告」、「返事要求」、「懇願」といった 4 つの発話要素に関して両者の使用頻度はほぼ同じであり、有意差がない。「名乗り」、「状況説明」、「察し」、「詫び」、「間接依頼」といった 5 つの発話要素に関して日本語母語話者の使用頻度が大きい中国人学習者を上回っている。「挨拶」、「念押し」、「直接依頼」、「先行感謝」、「祝福」といった 5 つの発話要素に関して、中国人学習者の使用頻度は日本語母語話者を上回っている。特に「念押し」、「先行感謝」、「祝福」といった発話要素は中国人学習者に使われているが日本語母語話者からは観察されなかった。

表 2 発話要素に対する日中対照

発話要素	依頼対象が上位者の場合					依頼対象が同位者の場合				
	日本語学習者		日本語母語話者		有意差の有無	日本語学習者		日本語母語話者		有意差の有無
	回数	頻度	回数	頻度		回数	頻度	回数	頻度	
呼称	99	96.1%	45	91.8%	無し (p>.05)	101	98.1%	45	91.8%	無し (p>.05)
挨拶	94	91.3%	29	59.2%	あり (p<.05)	96	93.2%	41	83.7%	無し (p>.05)
名乗り	9	8.7%	29	59.2%	あり (p<.05)	2	1.9%	21	42.9%	あり (p<.05)
予告	29	28.2%	21	42.9%	無し (p>.05)	46	44.7%	25	51.0%	無し (p>.05)
状況説明	89	86.4%	49	100.0%	あり (p<.05)	82	79.6%	33	67.3%	無し (p>.05)
念押し	21	20.4%	0	0.0%	あり (p<.05)	32	31.1%	21	42.9%	無し (p>.05)
察し	32	31.1%	37	75.5%	あり (p<.05)	0	0.0%	12	24.5%	あり (p<.05)
詫び	38	36.9%	33	67.3%	あり (p<.05)	10	9.7%	16	32.7%	あり (p<.05)
間接依頼	14	13.6%	16	32.7%	あり (p<.05)	2	1.9%	8	16.3%	あり (p<.05)
直接依頼	89	86.4%	29	59.2%	あり (p<.05)	98	95.1%	41	83.7%	あり (p<.05)
返事要求	13	12.6%	8	16.3%	無し (p>.05)	17	16.5%	16	32.7%	あり (p<.05)
先行感謝	22	21.4%	0	0.0%	あり (p<.05)	26	25.2%	0	0.0%	あり (p<.05)
懇願	60	58.3%	37	75.5%	無し (p>.05)	49	47.6%	21	42.9%	無し (p>.05)
祝福	17	16.5%	0	0.0%	あり (p<.05)	27	26.2%	0	0.0%	あり (p<.05)

(出所) 筆者作成

(2) 依頼対象が同位者である場合、「呼称」、「挨拶」、「予告」、「状況説明」、「念押し」、「懇願」などの6つの発話要素に関して、使用頻度に有意差がなかった。「名乗り」、「察し」、「詫び」、「間接依頼」、「返事要求」など5つの発話要素に関して、日本語母語話者の使用頻度が中国人学習者より高い。「直接依頼」、「先行感謝」、「祝福」などの発話要素に関して中国人学習者の使用頻度が日本語母語話者より高い。特に、「先行感謝」、「祝福」といった発話要素は日本語母語話者から観察されなかった。

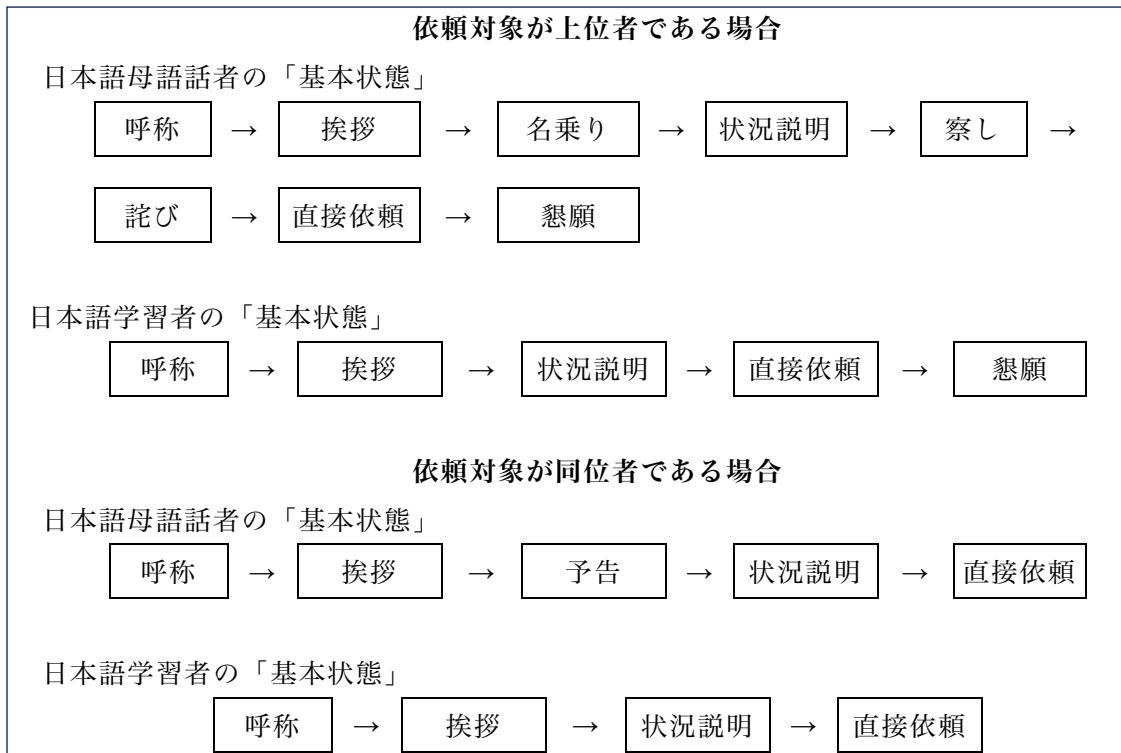
(3) 日本語母語話者に多く使用された「名乗り」、「状況説明」、「察し」、「詫び」、「間接依頼」などの発話要素は依頼という脅かし行為を緩和する機能を担っている。一方、中国人学習者に多用されている「挨拶」、「先行感謝」、「祝福」などの発話要素は相手と友好関係を築こうとする機能をはたしている。

#### 4.2 電子メールによる依頼行動の「基本状態」の日中対照

DP理論に基づき、使用頻度が50%を超えた項目を基本状態に同定する。次では日本語母語話者と中国人学習者が異なる場面における電子メールによる依頼行動の「基本状態」について考察していく。

図2をみて分かるように、日本語母語話者の「基本状態」は依頼対象が上位者である場合、「呼称」などという8つの発話要素からなっており、依頼対象が同位者である場合より、「名乗り」、「察し」、「詫び」、「懇願」などという4つの発話要素を多く使用している。この4つの発話要素は唐突感を減少したり、ネガティブ・フェイスの侵害を緩和したりする機能を

図2 電子メールにおける依頼行動の「基本状態」



(出所) 筆者作成

もっているため、日本語母語話者は力関係を強く意識したうえで、依頼行動を行っていることが分かる。一方、中国人学習者の「基本状態」は依頼対象が上位者である場合、5つの発話要素からなっており、依頼対象が同位者である場合より「懇願」という発話要素を多く使用している。以上のことから、中国人学習者は依頼行為を行う際に力関係を意識しているが、日本語母語話者ほどではないといえよう。

## 5. 終わりに

本稿では、中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に両者の電子メールによる依頼行動の相違を考察することを通して次のようなことが分かった。

(1) 日本語母語話者の「基本状態」は依頼対象が上位者である場合、呼称—挨拶—名乗り—状況説明—察し—詫び—直接依頼—懇願となっており、依頼対象が同位者である場合、呼称—挨拶—予告—状況説明—直接依頼となっている。上下関係は日本語母語話者の電子メールによる依頼行動の影響要因となっているため、上位者に対し、人間関係を維持する発話要素をより多く使用している。

(2) 中国人学習者の「基本状態」は依頼対象が上位者である場合、呼称—挨拶—状況説明—直接依頼—懇願となっており、依頼対象が同位者である場合、呼称—挨拶—状況説明—直接依頼となっている。上下関係は中国人学習者の依頼行動に影響しているが、上下関係の意識は日本語母語話者ほどではなかった。

(3) 日本語母語話者は「察し」、「詫び」のような相手のネガティブ・フェイスへの侵害を緩和するような発話要素を多く使用するが、中国人学習者は日本語母語話者から観察されなかった「先行感謝」、「祝福」のような相手と友好的人間関係を築こうとするポジティブな発話要素も使用している。

今回は上下関係が電子メールによる依頼行動へ与える影響を考察したが、親疎関係や依頼事件の難易度などについては考察しなかった。今後データを増やしたうえで研究を深めていきたい。

## 参考文献

- 李 宜真 (2008) 「依頼の言語行動に関する日中語対照研究—ポライトネスの観点から—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』3号, pp. 117~129
- 伊藤有加 (2003) 「中国人留学生と日本人学生との接触場面における依頼会話の切り出しについての考察」『日本語教育と異文化理解』, pp. 1~9
- 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『国立国語研究所・談話のポライトネス』凡人社, pp. 9~58
- 宇佐美まゆみ (2003) 「改訂版：基本的な文字化の原則」多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究」平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究成果報告書 東京外国語大学, pp. 4~21

- 宇佐美まゆみ (2006) 「自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論—対人コミュニケーション論としてのディスコース・ポライトネス理論の考え方—」第1回ルーマニア日本語教師会日本語教育・日本語学シンポジウム, pp. 12~25
- 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『社会言語科学』, pp. 150~181
- 宇佐美まゆみ (2014) 「ディスコース・ポライトネス理論から見るアイデンティティ」CAJLE 2014 年次大会 (<http://www.jp.cajle.info/cajle2014/>) モントリオール, カナダ
- 小林 (伊藤) 有加 (2004) 「中国人留学生と日本人学生との依頼会話—依頼応答から終結までを中心に—」『日本語教育と異文化理解』, pp. 25~33
- 謝オン (2001) 「談話レベルから見た『依頼発話』の切り出し方—日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から—」『日本語研究教育年報』, pp. 77~101
- 謝韞 (2007) 「依頼行動の対照研究から見た日中の対人コミュニケーションの特徴—ディスコース・ポライトネス理論の観点—」平成19年度東京外国語大学博士論文
- 浜田麻里 (1995) 「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略—」『日本語学』 (14/10), pp. 69~75
- 水野かほ (1996) 「『依頼』の言語行動における中間言語語用論—中国人日本語学習者の場合—」『言語文化論集』第XVⅡ巻第2号, pp. 91~106
- 楊雪丹 (2004) 「依頼のストラテジーの中日対照」『日本語教育と異文化理解』, pp. 61~69
- 母育新, 鄧永璋 (2010) 「基于話語礼貌理論的日語請求行為研究」『外語教学』, pp. 39~43
- Brown, P. and S. C. Levinson (1987), *Politeness: Some Universals of Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.